

題目 「親鸞」考察

堤 静香

目次

はじめに

I. 親鸞の境涯

1. 四つの岐路
2. 法然との出会い
3. 愚禿親鸞

II. 稲田草庵「西念寺」のこと

1. 坊守りのお話——現地取材
2. 稲田と京都

III. 親鸞の思想

1. 教行信証
2. 蓮如と歎異抄
3. キリスト教と親鸞

おわりに

参考文献

はじめに

「明日ありと思う心の仇桜 夜半に嵐の吹かぬものは」

「梅檀は双葉より芳し」というが、この詩は親鸞が9歳の春父母の死によって天台座主の慈円の元で得度する為に比叡山に上る時に詠ったものである。9歳の子供が、このような心境を詠い上げられるものだろうか？ 毅然とした覚悟が伺われ驚きながら何度も読み返し心に刻むようになった。この詩に出逢ったのは、思えば25年も前、私が母から貰った浄土真宗の経本を読み上げるようになってからだった。もともと生家が代々の、敬虔な浄土真宗本願寺派の信徒であり、教行信証の正信念仏偈や浄土三部経の仏説阿弥陀経、蓮如の御文章等の経を、子供の頃から聴いて育ったせいか、何ら違和感を持つ事も無く常に親鸞は生活の隣にあったと言える。

しかし、本当の意味で親鸞をもっと内なる所に感じ深く掘り下げて考えるようになったのは、5年前の生死を彷徨う大病を通してからだと言えよう。私は100万人に1人という稀な頭頸部に出来た骨のがんに罹患した、5年生存率は僅か30%弱。病名は「骨肉腫」、昔は不治の病とされ生還する人はいなかったと言われている難病である。45年前に『愛と死を見つめて』のヒロインの大島みち子さん、「ミコ」が罹患した同じ病であった。私はこの病気を宣告された時、殆ど生きている気持ちの状態ではなかった、顔が半分無くなるという現実に奈落の底に突き落とされた恐怖の感覚しか覚えていない。ただただ終日、仏壇の前に座って念じる世界に逃げ込む事しか出来なかった。

私の好きな正信念仏偈、仏説阿弥陀経、御文章の中の白骨の鈔等、繰り返し繰り返し憑かれたように拝んで、他の事など考える事さえ恐ろしかった。10日程経ったある朝、誰かに抱えられているように身体が軽くなったのを忘れることが出来ない。次第に心も軽くなり、手術祈願に日頃から参詣している神社に行ってみようかと言う気持ちにもなった。神社から帰る頃には「おや？」と思う程、すっかり気持ちの持ちようが変わり、何か自分以外の力が働いているのを強く感じたことを鮮明に記憶している。

そして、それから不思議な現象が起こった。医学界でも症例の無い高度先進医療との遭遇。急転直下、手術を取り止め症例数0の重粒子線治療へのチャレンジ！まるで親鸞の説く本願力、阿弥陀如来に身を任せよと、光が私の行く未知なる道を、サッと照らし出した瞬間だったように思う。親鸞も六角堂における100日の参籠に於いて、聖徳太子（阿弥陀仏）の夢告という不思議な体験をした事が、彼の生涯を変える師、法然との出逢いに繋がりその後の親鸞の骨格に繋がって行ったのだと思い巡らすようになった。

「人は生きているのだろうか？ 生かされているのではあるまいか？」と強く感じるようになったのである。私はこの不思議な体験を通して、浄土真宗開祖としてではなく、哲学的な思想家「親鸞」を尋ねる表白の旅を思い立った。絶望の淵の親鸞は一体どんな生き方をしたのであろうか、考察をしてみたい。

1. 親鸞の境涯

1. 四つの岐路

生沈（1173～1262）

- 1) 親鸞は承安3年（1173）名門、日野一族日野有範の子として生まれた。父母の死後、9歳の春比叡山にのぼり、天台座主、慈円のもとで得度をする。その後20年に渡り厳しい修行を積むが、自力修行の限界と、比叡山の墮落に絶望して、100日間六角堂にこもる。（百日参籠という）
- 2) その時聖徳太子の夢告を得て、1202年法然上人の吉水草庵を訪ねるのが親鸞29歳、法然69歳の時のことであった。法然に弟子入りした親鸞はたちまち才覚を現し、法然の信頼を得る。しかし法然の念仏（専修念仏）は上下貴賤を問わず民衆に広く受け入れられていたが、これに対して旧仏教側（比叡山）の反発も高まった。そして事件は起こる。1207年法然の弟子、住連と安樂の二人が後鳥羽上皇の寵愛した女官と密通した事により上皇の逆鱗に触れ4人が死罪。専修念仏を禁止され、法然76歳は四国（讃岐）に、親鸞35歳は越後に流罪となる。この頃「僧にあらず、俗にあらず愚禿親鸞」と名乗った。
- 3) この越後の流罪は結果的に親鸞の生涯の大いなる転換期となって行く。恵心尼という女性を妻とし「肉食妻帯」の生活に入る。流罪から4年、親鸞は京都に戻ることも無く越後で3年を過ごした後、妻と2人の幼児を連れて、常陸の国（茨城県）稲田に居を定め布教活動を開始した。稲田において20年の間、農民を中心とする「浄土真宗」の初期教団を関東に形成して行った。またこの間に後の「教行信証」、浄土真宗の本典と言われる經典の草稿を行っていた。
- 4) 62歳のとき1234年、恵心尼を置いて、子供達を連れ京へ戻るが、そこには師の法然も既に亡くなり、相弟子の聖覚法師（「唯信抄」著者）も亡くなり、思い出の都に帰ってみても其処にはもう誰も居なかった。誰も居なくなった京の地で、それから没する迄の約30年の長きを、後世に残る「教行信証」を始めとする多くの著作物を書き残し、1262年の11月28日入滅する。親鸞の90年に及ぶ生涯に、1) 2) 3) 4) と符号を付けた理由は、宗教学者増谷文雄著「仏教と思想10」（P403,P119）と「絶望と歓喜」（P67）の中から引用した的確な一文が私の考察に重なった。

私は、親鸞の生涯には、四つの際立った折り目があったと思う。その第一は、その人が叡山を下って東山吉水の法然を訪れた時である。29歳の頃のことである。その第二は、今もいう越後に流されて、じっとわが身の内と外とを見詰め、ついに「愚禿親鸞」と名乗った時のことである。35歳の頃のことである。その第三は放免の沙汰を蒙り、やがて、妻子を具して関東に入り、念仏勧化のいとなみをはじめ

たころのことである。42歳の頃のことであった。そして、その第四には、関東における20年に及ぶ教化のいとなみを終え、京都に帰って隠棲の生活に入った時のことである。それは、ほぼ63歳の頃であったと推定せられる。

それらの生涯の折り目は、それぞれの曲折と波乱をもって彩られ、挫折と絶望をもって特徴づけられており、そこに血みどろになって血路を切り開くたびごとに、その人はみずから「親鸞」に形成してゆく。私が、その生涯をほかにしてその人の思想はたずねないと考えるのは、そのゆえである。また、それを翻していえば、そのゆえにこそ、その人の生涯は、その思想的意味を汲むことをもって第一義とせねばならぬと思惟せられるのである。

2. 法然との出逢い

親鸞が生涯慕った法然もまた、墮落の極にあった比叡山に絶望した人であった。1175年東山大谷の地に専修念仏の拠点を作り、「愚痴無知の徒」つまり身分の差別無く、無学文盲の農民にまで念仏を唱えれば浄土へ行けると説いた、法然43歳の時である。法然の教えはたちまち多くの民の心を魅了した。親鸞も百日参籠の後、吉水草庵の法然の元に足繁く通うようになり次第に傾倒して行く、親鸞29歳の時だった。親鸞は法然に対する気持ちは生涯変らなかった。根底には常に師法然の姿があったと言える。

「たとひ法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさうろう」『歎異抄』 第2段

「故聖人（黒谷源空聖人のことなり）のおほせに、源空があらんところへゆかんとおもはるべしと、たしかにうけたまわりしうへは、たとえ地獄なりとも、故聖人のわたらせたまふところへまいるべしとおもふなり」 覚如著 「執持鈔」

ようやく法然の元で専修念仏の日々に入った親鸞だったが、後鳥羽院の弾圧によって、安楽・住連・善綽・性願の4名は死罪。法然及び弟子7名は流罪。法然は讃岐に、親鸞は越後に流されるが、そのときの僧籍も剥奪された。僧侶が処罰される時は「還俗の手続」が必要だった。法然→藤井元彦 親鸞→藤井善信 と俗の姓名を与えられた。

しかし、教行信証によれば、その時すでに「しかれば、すでに僧にあらず、俗にあらず。この故に禿の字をもって姓となす」として、禿の字をその姓として用いた。禿と言うのは禿奴とか禿比丘とかいうように外相は僧体をなしているが、その内心と行状は僧にあらぬものを罵って言う言葉である。そして善信を改め親鸞と称した。その上、更に愚の一字を冠する時「愚禿親鸞」となるのである。「歎異抄」の末行に「流罪以後、愚禿親鸞とかかしめ給うなり」とあるのはその事であった。

3. 愚禿親鸞

歎異抄の末尾の文に記されている事

「親鸞、僧儀を改めて俗名を賜ふ。よって僧に非ず、俗に非ず。然るあいだ、禿の字をもって姓となして、奏聞を経られ華んぬ。かの御申し状、今に外記庁に納まると伝々 流罪以後、愚禿親鸞と書かしめたまふなり」

「歎異抄」の第十三段に次の一句がある。

「ひとへに賢善精進の相をほかにしめしてうちには虚仮いだけるものか」

「選択本願念仏集」の第八段に同じようなくだりがある。

「外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐くことを得ざれ」とある。

髪を剃り袈裟衣をつけ、出家の外相だけをととのえたと、それでもう俗を出たような錯覚に陥る。更に少しばかり仏教を学び行ずると、直ぐに賢善精進の顔をしたくなる。だが内と外とはまだ相応していない、それが虚仮である。内外不相応の虚仮の姿ほど滑稽なもの無く、またこれほど賤しいものは無いのである。

自分自身に鋭い省察の刃をあててみると、そこに見出される自己の姿は依然として恥ずべき虚仮のそれではしかなかった。憤怒やるかたないけれど、残念ではあるけれど、非僧非俗の「禿」の字が自分に一番相応しいのではないかとそこに思い至った。「愚禿親鸞」でいいではないか。「流罪以後、愚禿親鸞と書かしめたまふなり」「歎異抄」絶望の中から見出した一筋の小さな道は自分への納得であった。「虚仮」（こけ）という言葉は親鸞の流罪の憤りをよくあらわしている。

II. 稲田草庵・「西念寺」のこと

茨城県笠間郡稲田に「稲田御坊」という、親鸞聖人が確実に生きた20年の息遣いが聞こえる寺がある。寺の名を西念寺というが、親鸞にこれほど所縁（ゆかり）が深いこの寺は一般には知られていない、まことに不思議な事である。

11月初め、高く晴れ渡った錦秋の頃、私はその地を訪れた。季節のせいでは無い、西念寺のそこだけが750年前の畏怖すべき静けさと澄み切った空気を残していた。

大きな古木に囲まれた枯れ葉の参道を上がって行くと、西念寺の門は草庵と云われる風情を残し、重々しい石札に「親鸞聖人教行信証御製作地・浄土真宗別格本山」と立派な文字が彫り込まれている。門を潜ると静けさは更に増し、下界を遮断したような佇まいの本堂が現れて来た。本堂に向かって石畳を歩いて行くと左手に、境内を覆うような樹木が「こち

らだ」と言うように手招きをしている。「親鸞聖人お手植えのお葉付き銀杏」の立て札を読むと700年以上も前の、天然記念物に指定された珍しい銀杏の樹であった。

このように歴史を刻んだ寺が文献や小説にも殆ど取り上げられず、世間一般にあまり知られていない。これは果たして何故なのだろうか？。

この西念寺を尋ねるように勧めてくれたのは、因縁の出逢いとしか言い様のない人であった。45年前、小説と映画の大ベストセラーの金字塔を打ち立てた「愛と死を見つめて」の著者、河野實氏、マコである。私は自分の病気を機に3年程前から、この河野實氏と親交を頂くようになった。主人公のミコと同じ「骨肉腫」の私が、45年の時を得て出現した時の驚きようは言葉にならないものだったらしい。「身の毛がよだった」と表現されたが、彼の青春を駆け抜けた衝撃的な人生を左右する出来事は、それで終わることは無く、常にその永い影を背負って生きねばならなかったある種、拷問のようなものではなかったかと推測に難くない。そのマコに親鸞を考察している由連絡をすると、時を同じくして彼もまた親鸞に傾倒し「肉食妻帯にまみれた自分を見つめなおしている」という話を伺って驚いた。マコは親鸞を書くのであれば西念寺を訪れるようにとの助言を下さり、夏、自ら案内を買って出て下さったが実現に至らず、秋、一人訪れるに至った経緯がある。かくして、親鸞好学の士として、マコの勧める西念寺へ訪れることになった。

1. 坊守りのお話

私は幸運にも、30年間この寺に住む「坊守り（ぼうもり）」の石井さんと言う人に取材をする事が出来た。御年85歳の翁は、何処から見ても60代にしか見えず、西念寺の広々とした寒い本堂に、素足で正座して快く取材に応じて下さった。しかも1時間余もの長い間、石井さんの口から諳んじられる寺や僧名や年号は、私が延々と文献と睨み合いをして来たそれであった。感服の極みである。

まず私は、浄土真宗信徒の知り得る処から切り込ませて頂くことにした。

私：「浄土真宗の坊守りと言えば女性の方、所謂、奥様の仕事と伺っていますが」。

石井さん：「その通り。本来、浄土真宗のお寺は、内儀(奥方)がその世話(坊を守る)をするのが仕来たりです。しかし、西念寺は代々、得度をした男性(僧)が住職を助ける為に坊守りの仕事をします。これは、真宗の中で西念寺だけです。」 石井さんは意外な、しかし願っても無い「特ダネ」を冒頭から下さった。

石井さん：「浄土真宗信徒でしたらご存知だと思いますが、祀り方にお気が付かれますか？」と、広々とした本堂の一段上がった奥の立派な仏像を指して仰った。

石井さん：「まず、中央が阿弥陀如来像、向かって右側が親鸞聖人像、左側が蓮如上人像ですね、普通は・・・」と話されながら私を左側の仏像の方へ手招くと、「女性像に見えませんか？」と、ひよんな事を聞かれた。

私：「普通は左側は蓮如様が祀られますよね、我が家のご仏壇はそう習ってお祀りしていますが」と私が石井さんに申し上げると、思わぬ衝撃的な答えが返ってきた。

石井さん：「そうです、普通は東西、両本願寺やその他の浄土真宗分派の寺院では皆、中央が阿弥陀如来像、右が親鸞聖人像、左が蓮如上人像と決まっています。しかし、ここ西念寺だけは、恵信尼公のお姿をお祀りしております。」

私は石井さんが淡々と語るこの事実は、大いなるスcoopではないかと飛び上がってしまった。

石井さん：「恵信尼公は、佐渡の流罪が解けた後の越後から親鸞聖人を支え、この西念寺にあたる草庵で20年の長きに渡りお裏方(坊守り)として生を営み、聖人が京へ戻られた後も関東の弟子達の気持ちを統一されるのに尽力されました。87歳のご往生まで、妻として、母として6人のお子方を育てられ、親鸞聖人の教行信証草稿の折はお傍で「しわ伸ばし教行信証」と言われる程、お裏方の内助の功は大きく弟子達の信頼も厚かったと言われています。その為この西念寺では、蓮如様では無く親鸞聖人を支えたお裏方の恵信尼公をお祀りしております。家は夫婦が助け合って一家を成すように、宗派も夫婦の力によって形成されると云う「妻帯」の深い意味を重んじています。」

朗々とした澀みのない石井さんの熱い語り口は、あらゆる文献にも書かれていない尊い真実だった。「宗教学者でもこの祀り方に気が付かない方が多いです、浄土真宗信徒でもなかなか気が付かない」と石井さんは笑われたが、私は笑う気にはなれず、目頭が熱くなり涙が滲むのを禁じ得なかった。

石井さん：「最後に天井をご覧下さい。一番大事なものがもう一つ此処にはあります。」

私は石井さんの指差す天井を見ると、そこには「真宗最初門」(真宗最初の門)と書かれた大きな額が架けられていた。

石井さん：「親鸞聖人が、この稲田の地で初めて真宗開祖をした、その意の額です。」

私は言葉を失念していた、石井さんのお話はその位大きな言葉だった。

此処稲田が真宗発祥の地であったのだ、と確信するに至った。

この地で20年も暮らして来て、今更、再び京に戻ると言う62歳の親鸞を恵心尼はどんな気持ちで見送ったのであろうか？身を切られるような哀しみがあつたに違いない。寺から程近いところに「見返り橋」と言う、京に戻る親鸞が恵心尼を振り返ったという橋が、今でも昨日の事ように残っている。何ともの哀しい佇まいであろうか。

「別れじをさのみ嘆くな法の坂、また会う国のありと思えば」

私は石井さんに大切なことをお尋ねした。

私：「親鸞聖人が京へ戻られたのは、どういう理由があつたとお考えになられますか？」

石井さん：「諸説あつて真意の処は解りませんが、理由の1つに、教行信証の草稿を早めたからではないでしょうか？」非常に鋭い指摘だと思った。

石井さん：「当時、印刷技術は関東には無く、殆どが京都か奈良と言われています。20年に渡って練り上げていた物を早く経典にしたからではないでしょうか？」

同感だった！私も理由はそのような事、いわゆる親鸞の中に貯めて置いた草稿を、後世に伝える使命のような物を感じたからではないかと思っていた。

何故？関東を離れたか？ 此れも750年経った今でも真実は解明されていない。

しかし、石井さんと私の考えが同じであった事が大収穫であった。

石井さん：「頂骨堂が山の上に有りますが、御覧になりますか？」

私：「はい是非伺いしたいです。然し京都で亡くなられた聖人のお骨がどうして関東に有るのですか。」私は単純な質問を試してみた。

石井さん：「良い質問ですね。訃報を受けた恵心尼公は、父（親鸞）の傍に仕えていた娘の覚信尼に宛てて、（宗教）弾圧が続いている京に聖人の遺骨を置いては危ないから、たとえ一部でも遺骨を稲田に運ぶように文をしたためられました。真宗教最古の御廟で、京都の大谷廟よりも古い御廟です。」石井さんは歴史絵巻を繰り広げて下さった。

この西念寺と言う空間は何であろうか？ 正に浄土真宗の聖地（メッカ）ではないか。全てが京都の大真宗教団のそれよりも古い、親鸞がここで生活したそのものの息遣いが聞こえて来る。前述のマコも言うておられたが、真宗教団のメッカは西念寺にある、ということが浮き彫りにされた。

大正14年、六角堂の頂骨堂は、真宗十派本山法主の参拝により、稲田西念寺の山上に再建された、真宗最古の親鸞聖人の御廟であった。

2. 稲田と京都

私は石井さんの勧めで、頂骨堂に通じる落葉樹の落ち葉が深くなった坂道を登って行った。鬱蒼とした杉の木立を抜けると、途中から眼前が開け、遙か前方の山並みが秋の高い空に映えていた。稜線は何故か京都の比叡山を思わせるようだ、と私はふと思った。そんな気持ちを抱きながら、落ち葉を踏みしめ尚登って行くと立て札がある。その内容は今しがた私が思ったと同じ内容の文章だったので驚いた。この地が京都を思わせ、あの山が比叡山を思わせる場所なので、「六角堂 ご夢想の山」としたためられている。前方の山は御伝承（上三段）の「東方を見れば峨々たる岳山あり その高山に数千万億、有精群集せり」と書かれた峨々たる岳山であった。

「この地こそ六角堂ご夢想の地に符号せり」と下二段の中に覚如上人は明記している。

「かくして前方の山（吾国山・わがくにさん）は比叡山を彷彿せしめしていると親鸞聖人は稲田の御草庵の地形を御気に召されて20年の長きに渡り御逗留されたのである。」

御伝承（上三段）

胸が締め付けられる思いに至った。妻子を連れて、宗教の迫害に耐えながら、越後からどの様な気持ちでこの地に辿り着いたのか、そのように親鸞に思いを馳せると、やはりそこには畏敬と尊敬の念が止むことのない法然に出逢った京都への気持ちがあったのだろうと推測される。

親鸞は、私と同じようにこの場所から、遙か前方の山々を仰ぎ見、まるで比叡山の稜線

のようだと感じたに違いない、あの山（比叡山）の向こうには法然の居た吉水草庵がある。あの山を見る度に浄土教を学んだ法然への思いにふける事ができる、そんな気持ちで稲田のこの地を選ばれたのではないかと確信したのだった。教行信証の草稿が抄った所以である。少し汗ばんで来た私は、山の頂き迄登って来ると、京都の六角堂を思わせる頂骨堂が、手入れの行き届いた樹木の中に囲まれ、ひっそり佇んでいた。

「親鸞聖人御頂骨堂由緒記」

親鸞聖人が稲田より京へ戻られた後も南都北嶺の迫害があり、ややもすれば腕力を以って事を決せんとし、法然上人の東山吉水の墳墓も暴かれんとして、門弟の頼綱入道蓬生らを苦しめたのである。

聖人ご入滅の折、稲田禅坊二世の法興坊教念は上洛して、すでに京都在住の覚信尼公（聖人の娘）に恵信尼公の深い思し召し（東山大谷（地名）の墓を心配しておられる事）をお伝えしたので、覚信尼公は聖人のお頂骨を密かに教念に分与せられた。

かくして安全な稲田へ御分骨は教念により無事に帰着して、恵信尼公を始め道俗にご披露申し上げたのである。

（中略） 恵信尼公のご意思に従って京都より十年早くご草庵裏山の勝地に真宗最古の廟としてお頂骨を奉安した。これにより稲田草庵が関東教団の中心になったのである。

恵信尼の英断は見上げた内助の功だと敬服する。それというのは浄土真宗信徒の多くが、親鸞聖人のお墓は京都東山の大大谷本廟（西大谷）以外にも、ある事さえ知らないのであった。20年前に西本願寺から、生前戒名を受けた敬虔な我が母親でさえ稲田のご廟を知らない。更に、その他の真宗信徒達に問い質しても誰一人知らなかった。

京都こそが親鸞聖人の墓所だと思い、稲田の20年に及ぶ生活を知る人は宗教学者か、私のように論文の為の文献をあさった末、稲田に辿り着いた「輩」くらいではないだろうか。誠に不思議な事である。それは何故だろうか。かろうじて増谷文雄著作全集の P98～P107 に「教行信証の製作のこと」として関東稲田草庵での事が書かれているが、親鸞20年の草稿の中身としてはいささか迫力に欠けている。通り抜けた感しか見出せず、親鸞の境地、恵心尼と子供達の生活、信徒達との関係の考察には至っていないと思う。文献にも載らないのは何故であろうか？

むしろ、短い文章ではあるが、梅原猛が「絶望と歓喜」の P327 で書いている一文を引用したい。遠からずも近い親鸞の境地を言いあてているのではないだろうか。

「とにかく常陸において親鸞はもっとも充実した時を送った。しかし彼は常陸を離れて京都に帰った。どうしてであろうか。定かな事はわからないが「教行信証」著作の為であるとか、丁度その頃、関東においてもさかんになった念仏弾圧のためであったと

か、又門弟達の信仰に親鸞があいそをつかせたせいだとか、いろいろ説が語られる。しかし、晩年の道元が病気をして都へ帰ろうとした事を考えると、かなり親鸞も道元と同じ心、故郷である都が恋しかったのかもしれない。「つくべき縁あればともない、はなるべき縁あれば離る」と、語るこの人（親鸞）にはかなり自由な人生があったのであろう。

坊守、石井さんのお話は驚嘆の連続であったが、稲田草庵における西念寺と、頂骨堂の取材をする事によって、私の考察に文献にも見る事の出来なかった真実の深みが増したことは、新鮮かつ画期的な事だと自負に至った。

Ⅲ．親鸞の思想

1．教行信証

鎌倉時代の代表的な仏教思想家達、その代表の宗祖の著作集は今日膨大な量で残っている。法然（1133～1212）の著作集「選択本願念仏集」、親鸞（1173～1262）の著作集「教行信証」、道元（1200～1253）の著作集「正法眼蔵」、日蓮（1222～1282）の著作集「立正安国論」、この四人の宗祖が、わが国における仏教思想史の上に残した足跡は大きくその代表と言えよう。「教行信証」は親鸞が稲田草庵において書き留めておいた草稿が原型になり、齢62歳で京に戻った後30年の長きに渡って著した親鸞渾身の著作物であった。正式には「顕浄土真宗教行証文類」と言い、概ね五項目に分けられている。

1. 文類→「顕浄土真宗教行証文類」は浄土真宗根本聖典とされている。
2. 文意→文意とは文の意味を解きほぐしたものと言う意で、3つの労作がある「唯信鈔文意」「一念多念文意」「尊号真像銘文意」
3. 和讃→宗教的心情をかなでた「ほめうた」と言われ、325首に及ぶ。「浄土和讃」「浄土高僧和讃」「正像末和讃」
4. 抄録→84歳の晩年に著した「西方指南抄」本願念仏の教えの乱れを痛感し最後の命を燃やして著した書。
5. 書簡→弟子達の迷い、問いに答えて、親鸞が京都に隠棲した後したためられたもの。79歳頃～88歳の頃のものであった。「未燈鈔」「親鸞聖人御消息集」「親鸞聖人血脈集」に集録されている。

書簡の代表作に善鸞事件の「慈信房義絶状」と言うものがある。（善鸞は親鸞の息子）

1225年、京都に居た善鸞は、親鸞の名代で関東に下ったが、関東の信者達の結束が固く自分の入る余地が無いことを知り、浅はかな画策をする。弟子達の結束をかき乱す事件を起こすことになるが、これは親鸞にとって許すことの出来ないことであった。

「いまはおやということあるべからず、ことおもうことおもいきりたり。三宝、明神にもうしきりおわりぬ。かなしきことなり」「親鸞聖人血脈集」第二書簡

それは親鸞がその生涯に於いてしたための最も悲痛な書簡であったに違いない。弟子達への見せしめとは言え、最晩年に実の子を絶縁する事の哀しきは計り知れないものだと思う。

2. 蓮如と歎異抄

「歎異抄」は、たぶん、今日この国の仏教的文献のなかで、もっとも広く読まれている書物であると思われますが、このような状況は、きわめて近年のことです。おそらく、明治以前にさかのぼれば、状況はまったく異なったものであります。いま「歎異抄」をひもといてみると、その文末に蓮如の添え書きが書き加えられています。そこには、「聖教」はこの宗の大事なものであるから「宿善の機なきに於いては、左右なくこれを許すべからずものなり」と、漢文体をもってしるされています。察するところ、この「歎異抄」にしるされている、腹蔵の無い、大胆きわまる、ぎりぎりのところを打ち出しての親鸞の言葉は、じゅうぶんに機の熟したものにして、はじめて許されるべきものであって、そうでない者がこれを読んではあぶないというのが、蓮如のころであったにちがいません。「日本の仏教思想」 増谷文雄著より

明治30年代、宗教評論家 清沢満之氏によって、親鸞の新しい解釈が、世に示されたのである。蓮如の「御文抄」ではなく親鸞の「歎異抄」によって、親鸞本来の教えに変わって行った、所謂歎異抄がブームになったのは明治30年以後とされている。

即ち、真宗教団は、中興の祖である蓮如によって大教団になって行ったのは間違いないが、親鸞の教えが論じられている歎異抄はいつの間にか一般には読ませるな、と言う蓮如の意志が働いて、最も広く読まれていたのは蓮如の「御文抄」だった。

「歎異抄」が一般に知られなかったのは、真宗教団が長い間蓮如教団として拡大して行ったからだろう。どの家庭の仏壇にも、右の親鸞、左の蓮如と言うように必ず蓮如が祀られている。それは取りも直さず、浄土真宗は、京都の東西両本願寺派のものであり、親鸞が寓居した稲田御坊が今更あってはならなかったのではあるまいか。

そもそも浄土真宗自体、親鸞没後10年を経て、弟子達が作った教団であり、親鸞は夢々浄土宗（法然）を越える日本最大の信徒を持つ教団に為った事など知る由も無かった。加えて歎異抄も、親鸞の傍に長らく仕えた弟子の河田唯円によって、間違った教えを伝えてはならないと、親鸞の言葉をそのまま書き残した書であり、親鸞自身は編纂されたのを知らない訳であった。

「絶望と歓喜」の共著の中に増谷文雄と梅原猛の対談が蓮如と教団における関わり合いを

端的に現している箇所がある。

増谷：「歎異抄は長い間、一般にはこれを読まずな、と言う蓮如の言葉で「左右なくこれを許すべからず」と言うような考え方があった。」

それが明治30年以降、誰でもかれでも歎異抄というようになったのは、親鸞という人の価値が一般に広く認識されて来たということです。」

梅原：「清沢満之さんによって、親鸞そのものに帰れと言ったところにある。」

増谷：「清沢満之さんがなければ、今の真宗というものは無かったと思うのです。長い間真宗教団というのは結局は蓮如の教団だったでしょう。」

(中略)

「真宗教団の中で中心になっていたのは果たして本当に親鸞の思想だったかどうか。この教団において最も多く読まれていたのは、蓮如の「御文抄」でありました。

それが親鸞のものが、こうやって読まれるようになったのは明治30年代から」

梅原：「清沢満之さんによって、浄土教は大きく変りかけて来た。生の教団という考え方が教団の中に出てきた。浄土というのは死んでからの向こうにおくのではなく、(生きている) こっちに考えると、清沢さんはそうゆうふうに関鸞を解釈したという。」

増谷：「親鸞の浄土教というのは、生の浄土教ですね。しかし蓮如の教団におけるそれは生の念仏ではないでしょう。」

梅原：「蓮如教団というのはね、むしろ源信のような浄土教、、、。白骨の御文で象徴される無常の浄土教だ。蓮如はむしろ源信的ですね、死の浄土教、古い浄土教に近いもので、、。現代人に死んでからの浄土を説くというのは非常に困難に為って来ている。」

増谷：「清沢さんはそういうふうに関鸞を解釈したという。」

この二人の対談は、私が以前から思っていた蓮如の浄土真宗、いわゆる本願寺派と親鸞におけるメッカ派(親鸞にかえれ)の違い、更に生と死の浄土教の解釈の違いを見事に解説している箇所としてあえて明記した。

3. キリスト教と親鸞

「聖書」もイエスの死後、限界のある人間によって書かれたものであるから、イエスも聖書が今日これ程多くの世界の民に読まれている事など知る由も無い。

イエスと親鸞の出現のしかたに共通項が有るならば「新約聖書」と「歎異抄」も、本人では無く、弟子達の手によって作られた、と言う処で共通項が有るのではないだろうか。

更にキリスト教との比較をすれば、16世紀にマルチン・ルターによる宗教改革が起こった。「信仰だけで救われるのでしょうか？」という質問状をローマ法王に出したただけなのだ

が、マルチン・ルターの行動はプロテスタントの始まりに繋がって行った。

親鸞も、20年に及ぶ比叡山での厳しい修行の末、墮落の極にあった叡山を見限り、法然のもとに走る。浄土に行けるのは一部の階級の者だけであると説いた旧仏教に対し「念仏を唱えれば誰でも皆浄土に行けると説いた浄土教。

旧仏教に対する宗教改革は宗教弾圧、迫害に合う事になるが、親鸞もわが国に於けるプロテスタントに他なら無いのではあるまいか。

やがてプロテスタントはピューリタン（清教）として新しい宗派を形成して行った。

親鸞も法然の教えを更に深め浄土真宗という新しい礎を築いて行った。まさしく、親鸞の生き方こそ日本における宗教改革の何ものでもなかったのである。

おわりに

教行信証の執筆に没頭しながらも最晩年の親鸞の姿は、人間親鸞に思いを馳せる寂寥感溢れる名文が「末燈抄」に書かれている。

「目もみえず候。なにごとにもみなわすれて候うへに、ひとなどにあきらかにもうすべき身にもあらず候。よくよく浄土の学生にとひまふしたまふべし。あなかしこ、あなかしこ」 末燈鈔 第八書 末尾文

親鸞入滅のその日、親鸞聖人の孫 覚如上人の「御伝抄」の下巻、第六条を、現代語訳で引用してみた。

「聖人は弘長2年（1262）の11月下旬からいささか健康すぐれぬ様子で有りました。それからは世事を口にもせず、ひたすら仏思のふかきを説き声に他言を交えることも無く、もっぱら念仏を唱えて絶える間もありませんでした。そして同じく11月28日の昼頃、頭を北に、顔を西に、右脇を下にして、臥され、ついに念仏の声もたえおわりました。ときに齢90に達しておられました。お住居は、京都の左京の辺り、押小路南、万里の小路東でありましたので、亡骸を遥か鴨川の東、東山の西の麓、鳥辺野の南のあたり延仁寺にはこんで荼毘にふしました。遺骨は同じ東山の麓、鳥辺野の北のあたり、大谷の地におさめました。

その時、臨終におうた門下たち勸化を受けた老若の人々、皆聖人が世にあった頃を偲び、なくなられた今をかなしんで、涙をたれ、声をあげて泣かない者としてありませんでした。」

親鸞の90年に及ぶ、本願念仏の教えによって生きて来た境涯は、激動と波乱の連続であったが、信仰と教化に専念し、自らの信じる道を歩んで行った、所謂人間の愚かさを知っ

た人の生き様であったと思う。今、私の心の中にある親鸞は、浄土真宗本願寺派信徒として開祖を敬う見方より、哲学的な思想家として偉大な人間親鸞への畏敬の念のみあるのだった。私はこの「絶望と歓喜」の共著を解説した大嶺顕氏の言葉に親鸞そのものが集約されていると考え引用することにした。

「これまで、親鸞研究は大別すると、文学者や評論家達の仕事と、浄土真宗の内部での宗学者達の研究論文だが、それぞれに限界をもっている。

文学者達の描いた人間親鸞には仏教思想が欠落しているのに対して、宗学者達の研究は教義の概念的な解説以上に出ていないように思う。そういう種類の仕事だけではこの独創的な宗教家（親鸞）の真の面目を現代世界に蘇生させる事は出来ない。この二つの仕事の間に橋を架ける新しい仕事はどうしても必要だ。一方で親鸞を一宗派に正面から向き合うという親鸞を現代に生きる思想家として明らかにする仕事である。私も親鸞の思想が仏教の歴史、いな人類の精神史において果たした不朽の功績はここに現世の生き方そのものがあると思う。人生の一大事は臨死の瞬間ではなく、如来の本願一力に自分を任せきった信心の瞬間、つまり現在において解決されるという思想である。本当に阿弥陀仏に任せた信心の人は、今ここで既に阿弥陀仏の撰取の中で「生かされている自分」を発見するのだと親鸞は言うのである。つまり救いというのは臨終という未来に起こると言うのではなく、信心の現代に起こるのだと。親鸞はこの事を「信心の定まる時、往生また定まるなり」と言っている。

私の大病からの生還はまさしくこの一言に尽きるのだった。阿弥陀院如来の本願力に身を任せきったから、今の私があるのだと思う。他の事など考えることさえ恐ろしく、ただただ念じる世界に入っていただけの私が5年前に確実にいた。そして如来の光をその時感じたのは親鸞の説く<他力本願>に身を委ねた瞬間であったのだろう。阿弥陀如来に身を任せる事は意外に難しい。「善人であれば有るほど、自分で何とかしようと善行を積む心が働き、一心に他力本願を信じられない。ところが悪人は自分で何もする術を知らないので、すぎるしかない。だから悪人こそ往生出来る」これが「悪人正機説」の解釈である。身を委ねてみる事である。生きてより良い明日を迎える為の「生の浄土教」が親鸞が説く教えであると言えよう。私の親鸞考察の表白の旅は頭で考えるのでは無く、身体の五感を以って教えられた本願力の体験の旅であった事が解った。その旅路は時として辛く長いものであったが、常に親鸞は私の隣にいた。

今も不思議な出来事が起こることがある。それは親鸞の言う処の阿弥陀院如来に身を任せ切ったの日常だからなのだと確信をする処である。

「信心の定まれる時、往生また定まるなり」

愚禿親鸞

参考文献

- 日本の仏教思想 『親鸞』 増谷文雄 1985年 筑摩書房
- 増谷文雄 著作集10 『親鸞』 増谷文雄 1982年 角川書店
- ① 親鸞の生涯
- ② 親鸞の思想
- 増谷文雄 著作集2 『仏教とキリスト教』 1978年 角川書店
- 仏教の思想10
- 絶望と歓喜 『親鸞』 増谷文雄・梅原猛 1996年 角川文庫
- 仏教の思想1
- 知恵と慈悲 『ブツダ』 増谷文雄・梅原猛 1994年 角川書店
- 『浄土真宗本願寺派のお教』 監修 早島大英 1999年 双葉社
- 増補新版 『歎異抄』 野間宏 1985年 ちくまぶっく
- 『歎異抄』 増谷文雄 1985年 筑摩書房
- 『仏教百科（早わかり）』 監修 ひろさちや 1994年 主婦と生活社
- 『私訳歎異抄』 五木寛之 2007年 東京書籍
- 『親鸞』 佐古純一郎 1973年 教文館
- 『仏教とキリスト教』 滝沢克己 1999年 法蔵館
- 『歎異抄』 梅原真隆 訳注 1985年 角川文庫
- 『親鸞浄土教とキリスト教』 武田龍精 編 1996年 龍谷大学仏教文化研究所 刊
- 『奥村一郎選集』 オリエン特宗教研究所 第一巻 慈悲と隣人愛
- 『イエスと親鸞』 八木雄二 2002年 講談社選書
- 『キリスト教は仏教から何を学べるか』 南山宗教文化研究所 編
- 『親鸞』 吉川英治 1980年 講談社
- 『浄土真宗聖典』 真宗聖典編集委員会 1985年 西本願寺出版部
- 『根本仏教』 増谷文雄 1985年 筑摩書房
- 『親鸞のコスモロジー』 大嶺 顕 1990年 法蔵館
- 『親鸞のダイナミズム』 大嶺 顕 1993年 法蔵館
- 『『親鸞—私の宗教感』 亀井勝一郎 1954年 角川書店
- 『親鸞と現代』 武内義範 1974年 中央公論新社
- 『親鸞の思想構造』 上田義文 1993年 春秋社 刊
- 『思想読本親鸞』 吉本隆明 編 1982年 法蔵館